

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2020年7月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：留学生のキャリア形成を支援する大学日本語教育の役割
—キャリア形成プロセスの言語化を通じて—

申請者氏名：山本 晋也

主査 宮崎 里司

署名

宮崎里司



(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 池上 摩希子

署名

池上摩希子



(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 李 在鎬

署名

李在鎬



(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

<本論文の概要>

1. 本研究の目的

本研究は、大学留学を経て卒業後に日本での就職を実現した私費外国人学部留学生(以下、留学生)のキャリア形成プロセスに焦点を当てた実践研究である。その形成期間の中で行われた、研究的・教育的手法を用いて他者に向けての言語表現行為である「キャリア形成プロセスの言語化」を明らかにし、留学生のキャリア形成支援に対する大学日本語教育には、言語化を行うための場づくりが必要であると主張することを目的としている。

2. 本研究の構成

本研究は、上記の目的に従って、キャリア形成支援をめぐる大学日本語教育の課題を解明する研究アプローチとして、複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach :TEA) を援用し、検証を試みると共に、大学日本語教育の実践を通して、留学生の多様なキャリアを語る場について考察した。論文は、9章から構成されているが、以下、各章について、その概要を記述する。

第1章では、本研究の調査フィールドである地方小規模私立大学(X大学)の留学生の事例を踏まえ、客体化された日本語や日本(企業)文化の獲得によって、自己を日本社会に適応させていこうとする教育の発想を指す、準備主義的なキャリア観・言語教育観によって構成された日本社会の社会的現実と、留学生の多様なキャリア認識との乖離を指摘した。本研究では、その要因を日本のキャリア教育をめぐる議論から論じた。そこで本研究では、以下3点の研究課題(RQ)を実証的に検証することで、大学で学ぶ留学生のキャリア形成支援に対する日本語教育の役割に新たな視点を提示することをめざしている。

RQ1: 「キャリア」をめぐる先行研究の様相と課題はどのようなものであり、それを踏まえて日本語教育においてどのような研究・実践が必要か

RQ2: 留学生のキャリア形成プロセスを構成する経験と変容、およびその背景にある社会的要素とは何か

RQ3: 留学生のキャリア形成を支援する日本語教育からのアプローチは、いかに構想・実施がなされるのか、その結果としてどのような学びが育まれるのか

続く第 2 章では、日本の留学生政策の変遷と、大学・企業などにおける取り組みの事例から、留学生のキャリア形成に関する問題点を整理した。その目的は、日本の留学生受け入れをめぐる歴史の中に、留学生のキャリア形成、すなわち、彼(女)らが日本で生き、働くことがいかに位置づけられてきたかを確認することにある。その結果、現在日本で期待される「高度人材」のキャリアモデルをめぐって、エージェントである日本政府の狙いと、受け入れる企業や留学生の実態との間に深刻な乖離があることが判明した。そして、問題解決に向けて、1) 留学生・企業双方の声がどのような社会的・文化的文脈から生じているのかを問う視点が必要であること、2) 視点の構築に向けては、多様な人々との共生をめぐる「市民性教育」の視点が重要であり、そこに日本語教育の研究・実践が貢献する可能性があること の 2 点に言及した。

第 3 章では、心理学におけるキャリア議論の系譜を辿り、キャリア概念の理解とともに、留学生のキャリア形成プロセスに対する研究アプローチの方法を探ることを目的とした。そこで、本研究では、「ライフテーマの発見」を個人のキャリア形成の命題としたサビカス(2015)のキャリア構築理論に注目し、キャリアを「人生における様々な社会的役割や経験の積み重ねによって生じる、個人の主観的な意識変容の過程」として捉え、質的な研究手法を用いてアプローチしていくことを述べた。

第 4 章では、本研究の調査概要と、分析手法についてまとめた。本研究の調査協力者は、X 大学での留学生生活を経て、日本国内企業に就職した、東アジア地域出身で、中小企業や地場産業への就職というルートを辿っている私費留学生の 4 名である。本研究では、インタビューにおける 4 名の語りの音声記録を 1 次データとし、さらに、1 次データに基づき作成された文字化資料を 2 次データとして分析を行った。

第 5 章では、1) 留学生のキャリア形成プロセスを構成する経験や変容の意味、2) 経験や変容の背景にある社会的要素(社会的な後押しや妨げの力)を探るべく、TEM 図に現れた経験や選択の分岐点や、分岐点に影響を与えた社会的要素を抜粋し、一覧にまとめた。分析の結果、4 名の留学生のキャリア形成プロセスを構成する経験や変容として、大学内外の多様な人やコミュニティとの日本語を介した、コミュニティメンバーとの交渉や試行錯誤を指す相互行為の経験を通じて、日本語や日本語を使う人々との関係性、「人間関係の支え」「制度・環境による補助」「成長の実感」「土地・コミュニティへの愛着」の 4 要素からなる社会的な後押しの力と、「日本語の困難」「制度・環境の影響」「人間関係の問題」の 3 要素からなる社会的な妨げの力が、せめぎ合い

として働いていることが明らかになった。

トランジションの観点から大学卒業後のキャリア形成プロセスを言語化し、第 5 章の分析結果を相対化することを目的とした第 6 章では、第 5 章の調査協力者 4 名に対し、大学卒業後に社会人として働き始めてからのフォローアップインタビューを実施し、インタビューの結果をブリッジズ(2014)の「キャリア・トランジションモデル」の理論枠組みを援用して分析し、大学時代と、社会人になってからのキャリア・トランジションの 2 点のプロセスを提示した。その結果、1) 大学時代・社会人時代に経験したトランジション(移行・節目・転機)は、その時期区分においてあるべき自分の探求、つまり、自己アイデンティティの探求と形成の過程と重なること、そして、2) 学生時代のキャリア形成プロセスの言語化の経験が、卒業後のキャリア形成の土台となっていることの 2 点が明らかになった。以上の結果を踏まえて、大学時代の自己の役割やあり方をめぐる他者との対話の経験が、社会人としてのキャリア形成の土台となることを述べ、長期的なキャリア形成を視野に入れた支援の必要性に言及した。

第 7 章では、これまでの本研究の成果を踏まえて、X 大学にて筆者の実施した留学生のキャリア形成支援を主眼とした「日本語表現法Ⅱ」の実践を取り上げ、その教育的意味を明らかにすることを目標とした。分析では、実践に参加した留学生のロイ、シュウ(全て、仮名)の 2 名が作成したレポート記述の内容の変遷やディスカッションの様子から、彼らの学びの実感と、本実践の教育的意味について考察した。その結果、ロイ(仮名)が自身のキャリアをめぐる振り返りを行う中で、過去の経験に新たな意味づけを行い、将来に続く自身の生き方を見いだしていく様子が見られた。

総合考察部分である第 8 章では 3 点の研究課題への回答を示し、本研究の結論を述べた。RQ1 への回答として、留学生のキャリア形成支援に対する日本語教育の研究・実践の構想においては、準備主義的なキャリア観・言語教育観の脱構築が必要であるとした。さらに、留学生がどのような社会的役割を経験しているのか、また、その役割を担うまでの過程で、自己のあり方に対してどのような葛藤や変容が生じていたのかを把握し、「キャリア形成プロセスの言語化」を行う研究・実践が必要であると結論付けた。本研究の事例からは、調査協力者である 4 名の留学生それぞれの「留学」や「就職」に至るまでの径路の固有性・多様性が示された。これらの社会的要素がせめぎ合う緊張関係において個々の経験や変容が生じており、留学生のキャリア形成プロセスを構成していることを、RQ2 の回答とした。RQ3 では、キャリア形成プロセスの言

語化を行う日本語教育実践の意義は、キャリア形成の主体である留学生が、自らのことばで主体的なキャリア形成を実現していくことを可能とする点を回答とした。

結論と今後の課題を記述した 9 章では、長期的な留学生のキャリア・トランジションを支えるために、他者ととも自らのことばで自身のキャリアを語り、過去の経験や経験に対峙する自己に主体的・前向きな意味づけを行う場を、大学日本語教育の責任として大学を含む社会の中に実現していくと主張している。具体的には、1) なぜキャリアを語る場が必要なのか、2) 場づくりに向けて必要なことは何か、3) それは具体的にどのように実現できるのか、の 3 点について述べている。そして、他者ととも自らのことばでキャリアを語る場を、大学日本語教育の責任として大学を含む社会の中に保証していくべきであると言及している。2) については、客体化された日本語や日本(企業)文化の獲得によって、日本社会に適応させていこうとする準備主義的なキャリア観・言語教育観の見直しが必要であり、3) については、相互行為を行うことばの教育実践のみならず、相互行為の背景にある「人間関係」や「制度・環境」の要素への働きかけがポイントになると考えられた。

<本論文の評価>

本論文は、以上のような各章の記述の中で、キャリアの固有性・多様性に注目し、「キャリア形成プロセスの言語化」を手掛かりとして、大学日本語教育のあり方を論じた点にある。本研究について、以下のような点が評価できる。

- (1) 留学生の「キャリア形成プロセスの言語化」を丁寧に検証し、その形成支援に対する大学日本語教育には、言語化を行うための場づくりが必要と主張している点は、明確な主張性が伝わる。
- (2) 留学生の定住や近年の多文化共生にも関わるテーマであり、今後の日本社会全体において重要な研究であると認められる。
- (3) こうした重要なテーマに対して、筆者は、キャリア教育における従来のモデルを批判的に捉え、新たな分析モデルを提案している点や、日本語教育として「留学生のキャリア形成」にどのように関わっていくべきかという、今日的で重要な課題について、調査に基づいた分析や実践研究から論及した研究に仕上がっている。

- (4) 「主体的キャリア」について、キャリアモデルとして、トランジションモデルによる分析を、複線径路等至性アプローチ (TEA : Trajectory Equifinality Approach) を援用して、どのように落とし込めるかを、明示的に書き込む工夫がされている点も評価したい。

一方で、課題となる点も、以下のように列挙できる。

- (1) 先行研究のモデルと本研究のモデルをより明示的に比較・対照し、本研究のモデルがいかに優れているのかを現象ベースで議論してほしかった。
- (2) 本研究のモデルを評価する上で、全人的成長という概念が重要であると考えられるが、成長の度合いを測る明確な評価方法が記述されていない。
- (3) 「留学生のキャリア形成プロセス」を構成する経験として、多様な人々との日本語を介した相互行為があり、そうした経験がもたらす学びを可視化する必要がある、との主張が見られるが、実践の内実にどのように反映され実践そのものをどのように構成、また再構成していったのかを描き切れているとは言えず、実践そのもののオリジナリティとしては伝わってこない。
- (4) 今後は同種の研究を行う研究者との連携も視野に入れつつ、調査フィールドの拡大と分析事例の積み重ねを繰り返すとともに、径路の多様性に関する研究を重ねながら、より主張の妥当性を高める必要がある。
- (5) 留学生教育に加え、パーソンズ「職業選択理論」・スーパー「キャリア発達理論」・サピカス「キャリア構築理論」といった理論を複合的に取り入れ、オリジナリティを模索している点は理解できるが、移民・外国人労働者・グローバル人材の移動・外国人政策など、より学際的なアプローチが期待される。

<本論文の判定>

以上、本博士学位申請論文は、上記のような課題も認められるものの、日本語教育学の博士学位論文として認めることができる。